

SADI 30周年記念大会に向けて（第1報）

第29回目の金沢大会は、先月後半に、いまだコロナの影響下ながら一定の現地活動も行えて終了しました。さて、来年は30周年となりますので記念大会として開催要領の詳細は検討中ながら、酷暑の8月に入る時点で、とりあえず第1報を配信申します。

とは申せ、SADIも立ち上げから29年が過ぎ、3年以上にわたるコロナ禍も挟んでしまう事態から、この独特の集会について理解が薄れつつあるようにも聞きます。そこで、30周年のご案内では、その趣意や開催履歴（概要はHPに常時掲載）の確認から申し上げます。

SADIは、型通りの研修会などと別に、ダニ類と臨床の絡みを十分に勉強したいという欲求から、数名の同好の士（組織委員）が中心になり日本紅斑熱原発の地（阿南）で立ち上げました。通常の学会とは違う発想で、疫学問題のある地域で、ダニ、臨床、微生物など多様な関係者が手弁当で集まり、非会員制、規約や役員なしのNGOないし私的な立場から話題を出し合い、自由な討論を試みるものでした。

その後の開催では、年次ホストを職種や担当分野によらず（通常の学会等の主催にかかる立場にない方も多く含み）、各地方の疫学地域で熱心に活躍される方に委託して続けて来られました（委託は、個別の事情や変遷を組織委員会が調整しつつ）。

開催目的は、先端的な学術情報も歓迎しますが、地域ごとに開かれることで毎年違う地域の関係者と交流し情報を共有することが主です。概ね2泊3日の会期中に疫学地域を視察しダニ採集（疫学ツアーなどと呼ぶ）、時には患者さんとの交流まで含み老若男女問わず参加します。なお、ほかの関連研究会とは専門性の特化度で棲み分けて参りました。

以上のような履歴の中で、本集会は同好の士による参加という点で盛り上がりムードが強いため、切りの良い10周年、そして20周年に各々記念大会が行われ、来年は30周年の記念大会を迎えることになったのが経緯です。そこで、前例に倣い組織委員会が準備中です。

来年は出来る限りはお互いの顔がみえる形でSADIにふさわしい記念大会となるよう準備を進めていますので、開催地や会期など次報をお楽しみに、皆様とくに若い世代は参加発表などご準備下さい。